

最優秀賞受賞者現地調査報告

個人の部

第2部 最優秀賞

受賞者氏名 三田村 守夫 氏

住所 上川郡美瑛町字旭中央

審査員 北海道立上川農業試験場 技術普及部長 岩田 俊昭 氏

1 経営の概況

耕地面積 8.9ha (注: 田・畑などの合計面積)

表1 過去3カ年における水稲作付面積の推移

項目	年次	平成19年	平成20年	平成21年	3カ年平均
水稲作付面積		7.623ha (7.623)	7.597ha (7.623)	7.623ha (7.623)	7.614ha (7.623)

注) 加工用米を除く作付面積。()内は加工用米を含む作付面積。

2 家族の就農状況

夫婦2人による家族労働を主体とし、春の繁忙期に一部雇用労働あり。

表2 過去3カ年における家族労働

本人・続柄	年	性別	平成18年	平成19年	平成20年
本人	55	男			
妻	53	女			
三女	21	女			
母	82	女			

(備考: 平成21年12月15日現在)

3 立地条件と稲作の経歴

(1) 地勢・立地条件

美瑛町では畑作主体の営農が行われているが、旭地区は町内でも水稲作を中心に施設野菜が導入されているなど、上川盆地で主体の農業形態が営まれる総農家戸数56戸の地区である。場所的には美瑛町の北端に位置し西に美瑛川、北東を辺別川に挟まれた平坦地域であり、対岸は旭川市千代ヶ岡地区に隣接する。交通の便は恵まれており、付近をJR富良野線と国道237号線が通り、旭川空港も3～4kmと至近である。美瑛町市街地までは車で10分、旭川市内までは約30分の距離である。

美瑛町は標高が高く気象条件では、旭川市と比較してやや冷涼であるが、当地区はほぼ旭川市と同様の気温、日照と考えられ、風当たりも弱く稲作に適した条件となっている。水田は両河川の堆積土壌からなり沖積の黒ボク土が主体で、土壌型は褐色低地土になる。最近で

はやや低下したとはいえ、比較的透排水性が良好である。灌漑水は辺別川にある頭首口から取水され、水温は高めで水量も比較的十分で、基盤整備の行われているほ場は、用排水が分離されており、水田一筆ごとのきめ細かい水管理が可能となっている。

当地区は水稲作に加え、早くは昭和40年代から露地トマトなど野菜の導入が進み、同年代半ばからは、ハウストマトに移行するなど施設栽培に変えながら、現在も町内の主たる野菜産地になっている。なお、丘陵部では主に畑作が営まれ、馬鈴しょ、てん菜などが作付けされている。

(2) 稲作の経歴

三田村家は祖父が明治期に福井県から旭地区内の別の場所に入植し営農を開始、昭和44年に父が耕地面積の限界もありその土地を売却し現在地に移ったものの、さらに現在地の離農跡地を昭和61年に購入、耕地面積の拡大を図った。現在は借地とあわせ8.9haを作付け、うち水稲は7.6haであり転作田にはハウストマト40a、アスパラガス15a、その他を作付けしている。

水田は住宅地及び近接する2箇所に分かれており、日常の管理はきめ細かくできる。家族は4人で、農業従事者は夫婦2人であるが水稲+野菜の複合経営のため、水稲の農作業は主に守夫氏一人で行い、妻は主に野菜を担当するようにしている。4～5月の農繁期には播種では家族の協力、移植農作業では町の高齢者事業団から1人の雇用を入れ、労働力不足を補っている。

4 土地改良と稲作技術の特徴

(1) 作付品種

現在の主要な品種は「ななつぼし」である。平成21年まで「ほしのゆめ」を作付けしていたが、徐々に「ななつぼし」に切り替えをすすめ、平成21年には約1ha「ゆめぴりか」の作付けを開始した。「ほしのゆめ」は低タンパクで良質・良食味の特徴はあるものの、3品種ではコンタミの回避と同品種が低収なためもあり作付けを中止した。「ほしのゆめ」の10a当たり60kg低収という欠点を補うために、どうしても多窒素栽培になり、その結果、長所である低蛋白良食味の特徴を阻害してしまうなど、品種的に限界を感じたとのことである。

「ななつぼし」は平成16年からJAや稲作部会の方針もあって作付けの比重を高めている。熟期が「ほしのゆめ」と比較してやや遅くなる特性もあるが、旭地区では成苗ポット苗による早期移植によって、とくに問題にはなっていない。当品種の作付けにより収量と低蛋白米の生産量の確保に有利となっている。

昨年からの作付けを始めた「ゆめぴりか」は育苗しやすく、初期生育も良好であり栽培しやすい特徴があった。ただし、水口部分に不稔がやや目立たため、栽培にあたっては多少注意したいとのことであった。今年は配布される種子量で作付けを考えたいとのこと。

表3 年次別・品種別作付けの推移

年次・項目・品種		平成19年	平成20年	平成21年	
作付面積	品 種 名	ほしのゆめ	3.40ha	2.25ha	ha
		ななつぼし	4.23ha	5.34ha	6.73ha
		ゆめぴりか	ha	ha	0.89ha
	合 計	7.63ha	7.59ha	7.62ha	

(2) 土地改良と有機物管理、透排水性改善

土作りに関しては、秋にケイカルを10 aあたり100kgを毎年継続して施用している。加えて稲わら処理では、計画的に毎年15%を搬出する計画であるが、平成21年は秋が天候不良で実施が困難であった。鋤込みでは春施用から秋施用に替えた。鋤込みはなるべく早く、遅くとも10月10日頃までにロータリで比較的浅く耕起する。ケイカルの秋施用と合わせ腐熟促進効果が期待できる。また、ケイカル散布はそれまでのライムソアから効率化のためにブロードキャストに変更した。

透排水性改善対策では秋耕起を行った後に、サブソイラをほ場全面に施工している。ただし、土壌条件から細かく入れ過ぎると水の抜けが大きくなり、代かき時に入水に時間を要することから、間隔を約20mとして広くし、畦に対し斜め掛している。さらに先に掛けたものに直交するよう対角線方向にも1本入れることにしている。

ほ場整備では畦塗りを計画的に実施し、3年に1度の割合で畦の低い箇所を中心に補修を兼ね嵩上げを行っている。

稲わら搬出ではもともと地力が低いため、減収程度が大きくなり問題であるとのこと。従って有機物施用をかねてロータリによる秋鋤込みを行っている。部分的に透排水性が低下しているような場所には、栽培期間中に中干しの実施中に表面溝切りを行い、還元害の軽減と透水性の良化を図っている。

表4 年次別の土地改良と有機物管理、透排水性改善

年次・項目		平成19年	平成20年	平成21年
堆厩肥施用量 (kg/10 a)		- kg	- kg	- kg
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	%	%
	当年産	搬出	30%	15%
		秋鋤込	70%	85%
土壌改良材 (kg/10 a)	資材名	粒状ケイカル	粒状ケイカル	ケイカル
	施用量	100kg	100kg	100kg
透排水性改善		サブソイラ	サブソイラ	サブソイラ

(3) 耕起、施肥法

基肥は全層施肥と側条施肥を組み合わせている。全層には4 - 8 - 4を窒素4.5kg/10 a相当、側条には8 - 0 - 0を窒素4.5kg/10 a相当での施用にしている。

平成19年には側条は4.1kg/10 aであったが、平成20年には少し増量している。追肥は実施していない。作付けする品種特性やほ場の地力や保肥力によって施肥量を加減し、それは基本的に基肥量で調整する。なお、土壌診断は平成20年に中山間事業により全ほ場について実施し施肥量を確認した。その結果、この施肥量で高タンパク化や倒伏、病害虫の被害など問題は生じていない。成苗ポット苗に加え、この施肥体系で十分な初期生育量と生育中後半の生育確保ができています。「ななつぼし」は多肥にしてしまうと倒伏の発生や米粒タンパクが高くなるので、その点は特に注意している。

なお、施肥作業ではブロードキャストで縦と横方向に走行し丁寧に散布して、肥料ムラが生じないように細心の注意を払っている。

表5 年次別の本田施肥量の推移

項目		年次	平成19年			平成20年			平成21年		
			N	P	K	N	P	K	N	P	K
施肥 (kg/10a)	全層		4.48	5.76	4.48	4.48	5.76	4.48	4.48	5.76	4.48
	表層		-	-	-	-	-	-	-	-	-
	側条		4.14	2.30	2.30	4.50	2.50	2.50	4.50	2.50	2.50
追肥 (kg/10a)	量		-	-	-	-	-	-	-	-	-
	期日		-	-	-	-	-	-	-	-	-

(4) 育苗と移植

成苗ポット育苗にして約30年経過し、毎年、良質な苗を立てることができている。床土は購入した人工床土ではなく、収穫後の秋に本田から採取した土を使用している。一旦まとめて堆積保管し、育苗後に置床土が減少したハウスに薄く広げ、エンバクを6月初旬に播種、7月半ば頃に緑肥として鋤込みし、床土の培養を図っている。床土のpH、ECについては毎年の全ハウスから各2箇所の床土を採取し測定している。また、ハウスの融雪促進にもその土を利用し、置き床土の補充にもなっている。

ハウスのビニールは3月初めに展張し、置き床の乾燥と地温の上昇を図っている。乾いた頃を見計らい表層の土壌を採取し、ポットの詰土用に確保している。

播種は4月10日頃までに終えている。一穴に3粒程度を播種し、出芽確認できるまでシルバーポリで被覆保温、その後除去し管理を継続する。ただし、ハウス縁など出芽が遅れる部分は、1～2日余計に掛けておき、全体の苗が揃うような工夫を行っている。

育苗日数は苗代分けの確保と葉数4枚を目標に、40日間としている。追肥は行っていない。これまで大きな育苗障害は発生していない。なお現在の播種が早すぎる傾向にあるので、今後は作業時期を少し遅らせる計画である。

移植は地区の平均的な作業時期である5月16～20日にかけて行い、毎年5日間で終了している。栽植密度は株間を13cmで23.3株/m²としており、移植後の補植はしていない。

表6 年次別の育苗・移植の推移

年次・項目		平成19年	平成20年	平成21年
育苗形式名		成苗ポット	成苗ポット	成苗ポット
移植時期		5月16日～5月20日	5月16日～5月20日	5月15日～5月20日
栽植密度	畦幅×株間	33cm×13cm	33cm×13cm	33cm×13cm
	m ² 当たり株数	23.3株/m ²	23.3株/m ²	23.3株/m ²

(5) 水管理

上川盆地の6月以降の好天に加え成苗ポットと側条施肥の組み合わせで、初期生育は良好であるが、さらに浅水管理を行なって分けつ発生を促し、茎数を十分に確保している。稲わらの秋鋤込みにより部分的にワキの発生はあるが、秋の心土破砕と6月20日頃の中干しによって十分対応できており、水稻の生育に障害は生じていない。

7月の水管理では普及センターによる幼穂形成期の情報を参考に、自分のほ場でも実際に

確認を行い、冷害危険期の深水管理に活用している。深水管理といっても目分量で水深を判断することも多いが、三田村氏は全てのほ場の水口に「水深測定板（水見板）」を設置、水稻の生育進度に対応した正確な水深管理を行っている。幼穂形成期から徐々に水深を高め、前歴期間の終わりでは10cm、冷害危険期の最終段階では20cmを目標に管理している。夏季間の気象は比較的安定している地域であるが、畦塗り等の畦畔整備や適切な水管理で不稔の発生を抑制している。

落水時期は8月20日頃であるが、その後は表面滞水しやすい箇所を中心に溝切りを実施し、落水後におけるほ場全体の土壌水分を均一適切に保持するよう努めている。

(6) 雑草と病害虫の防除

本田の雑草は除草剤により効果的に防除されており、現在のところ雑草害は生じていない。剤の選定は2～3年に一度変更し、雑草に耐性が生じないようにローテーションしながら使用している。そのため、4、5年前はアメリカアゼナが繁茂したことがあったが、今はノビエを初め草で悩むことはなくなった。

病害虫対策では、旭地区は堤防が近いためにカメムシ類の発生が多い。そのため、きめ細かい発生予察に努力している。稲作部会の推進員として7月末までは5日おきに捕虫網ですくい取り調査を実施、その結果をJAに報告しており、地区ばかりでなく町内全体の状況を把握、参考にして防除に活用している。本格的に本田防除が始まる7月下旬からは、予定した防除の直前に予察調査を実施している。

かつては各戸により粉剤で行っていた防除も、2年前からはピークルを共同利用した個人による地上防除に移行し、通常年では年3回の作業を行っている。これまでもち病やカメムシ類等、病害虫による大きな被害は生じていない。

(7) 収穫および乾燥調製

収穫期が近づく时下見検査を受け、収穫時期の決定と調製時の注意事項を確認している。稲作部会は全ての会員に対し下見検査を義務づけている。

乾燥は43石と50石の乾燥機2台によって行っている。後者は遠赤外線を利用した乾燥機で、処理する米の70%に対応し、乾燥のメインに使用している。その結果、乾燥時間の短縮と米質の維持が図られている。前者では連続乾燥を行うが、水分が17%で一旦運転を停止するなど、間けつ乾燥的な使用法になっている。

篩目は品種の特性に応じて選択し、「ななつぼし」は例年1.95mmを使用するが、平成21年は冷害年でもあり、やむなく1.9mmを使用した。しかし、グレーダの工夫によって、1.9mmを掛けた後に1.95mmを通して屑米を選別し、選別の効率を向上させると同時に品質の高い高整粒米になるよう努力している。さらに、網下の米をグレーダで中間米を再選別するなどして、玄米を品質別に販売できるような工夫をしている。

5 産米出荷実績

過去3年間において100%の1等米の実績の他、平成19年は全量が低蛋白・高整粒米であり、平成20年はこれまた全量が高品質米であった(低タンパク・高整粒米が62%、低蛋白米が38%)。上川管内が厳しい冷害年であった平成21年では、産米の出荷に影響が生じたものの、それでも42%は高品質米であった。以上、過去3年間の平均で高品質米の出荷割合は90%となった。平

成21年は千粒重が平年に比較して1～2g軽くなった年次であったが、41%は高整粒米であった。今後の課題は冷害年における影響を極力少なくし、品質・収量の年次変動を小さくするであろう。

6 良質米の生産に関する技術と意識等

平成21年のような冷害で高品質米の生産が非常に低迷した年次においても、出荷実績が示すとおり三田村氏は、低タンパク・高整粒米の出荷率が高く、いわゆる高品質で良食味な米を安定生産している。その立派な成果を実現している技術は次のようなものと考えられる。

(1) 土壤に合った適正な有機物管理

従来は透排水性の良好なほ場であったが、作業機械の大型化により、年々透水性は低下しているのが現状である。また50%は砂壤土でもあり、適切な管理を怠れば段階的に地力が減耗しやすい条件にある。その中にある三田村氏は、心土破碎の実施と合わせケイカルを散布した上で稲わらを秋鋤込みし、適正な土壤管理に努めている。

ほ場によっては部分的にワキが生じる際にも中干し等で対応し、水稻生育に影響が生じないよう対策を講じている。

(2) 施肥の工夫

窒素施肥量は全層と側条を合わせても9kg/10aであり、多からず少なからずの適量となっている。上川盆地で基本的には初期生育の良好な地域ではあるが、全層と側条を半量ずつとして、初期生育の確保を確実なものとしている。

また、少肥密植栽培を8戸共同で専用移植機1台(2台所有していたが1台は故障廃棄)により継続している。この超密植栽培法により、米粒蛋白を0.3～0.5%、確実に低下させることができている。現在では専用機による栽培を行っている例は極めてまれであり、三田村氏の良食味米生産に対する意識の高さが感じられる。

(3) きめ細かい水管理

ともすれば、時期が来れば漫然と深水にし、水深を十分に確認しない管理が行われることもありがちであるが、三田村氏は幼穂形成期の確認など水稻の生育診断を基本に適切な水管理を実行している。毎日の水回りを行いながら、7月には全ほ場に「水深測定板(水見板)」を立て、水深の基準として利用するなど、是非参考にしたい点である。

(4) 収穫・乾燥・調製

水田1筆ごとに毎年収穫される米の収量や品質特徴を把握しておき、品質や米粒蛋白含有率からみて低蛋白米基準をクリアできるように、刈り取る水田の組み合わせを考えている。乾燥機単位で米の高品質を維持した上で、均質化が図られるよう収穫するほ場を決定している。

(5) 栽培基準の遵守

栽培全般の技術対応では、旭地区で生産される米の地区ブランド「あさひ娘」の栽培基準に準拠してすすめており、地域の米の安定化と評価の向上に一役かっていると思われる。

三田村氏は、今後も施設野菜との複合経営を行っていくが、高品質で食味の良い米の生産をすすめる中で、「YES! clean」基準による栽培を平成22年から開始する計画である。

平成21年は「ゆめぴりか」のデビューによって北海道米の一層の飛躍が期待できる年であった。しかし、道北地域でも冷害の影響を受け、品質収量とも不十分なものとなった。平成22年は前年の課題を反省しつつ、水管理を主体に改善点していく年である。三田村氏には、これからも地域の水稻生産者の模範となるよう、すばらしい実績を積み上げて頂くことをお願いして、現地報告のまとめとする。

最優秀賞受賞者現地調査報告

個人の一部

第4部 最優秀賞

(もち2.0ha以上)

受賞者氏名 鈴木博文氏

住所 北海道芦別市新城町194番地

審査員 北海道立中央農業試験場 主査 古原 洋氏

1 経営の概況

耕地面積 12.5ha

水田作付面積 5.1ha (3カ年平均)

項目	年次	平成19年	平成20年	平成21年	3カ年平均
水稲作付面積		3.9ha (6.4ha)	6.1ha (9.0ha)	5.9ha (8.5ha)	5.1ha (8.0ha)

注) 加工用米を除く作付面積。()内は加工用米を含む作付面積。

2 家族の就農状況

本人・続柄	年	性別	平成18年	平成19年	平成20年
本人	42	男	220	220	220
妻	38	女	220	220	220
父	78	男	100	100	100
母	76	女	100	100	100

(備考)

3 立地条件と稲作の経歴

(1) 地勢・立地条件

芦別市には国道38号と国道452号の国道2路線と道道11路線が通り、札幌市まで約110km、旭川市まで約40km、帯広市まで約140kmと道内の各主要都市を結ぶ地点に立地している。気候は大陸性で年間平均気温は7.9 と比較的温暖であるが、降雪量は多く、年間降雪量は約5m、最深積雪は約1mに達する。農業生産は、水稲を主体として畑作物、花き、野菜の複合経営と畜産に分かれるが、中でも水稲を柱とする複合経営が大半を占めている。農家戸数は、平成17年の農業センサスによると406戸で1戸当たりの経営耕地面積は7.7haとなっている。

同市新城町にある鈴木博文氏の水田は風当たりの強い高台とそこから標高で100mほど降りた場所の2ヶ所に分かれている。高台の水田では水はけは良いが、もう一方の水田は必ずしも水はけは良好でない。気温については近隣地区よりやや低い。

(2) 稲作の経歴

鈴木氏は平成15年に父から経営移譲を受け、もち米生産およびもち種子生産に取り組んでいる。ここ数年で規模を現在の倍程度に拡大する予定で、ほ場一筆毎のきめ細かな管理をどのように行うか、いかに健苗育成を図るべきかなど規模拡大した際に解決しなければならない課題について研究を進めている。経営移譲を受ける前には、新城中央利用協同組合の機械オペレーターとして地域にある45haの水田すべての耕起、収穫などを引き受けている。現在は同組合の機械部長として中核的な役割を果たしており、今後は地域のリーダーとして活躍が期待されている。

4 稲作技術の特徴

(1) 有機物の施用と透排水性改善

高台の水田は風通しが良く乾きやすいことから秋鋤込みを行っている。もう一方の水田は褐色低地土で高台に比べると雪解けが遅いため、融雪剤と土壌改良材を兼ねて鉄ケイカルを施用し、さらに溝切りによって乾燥を促進している。機械オペレーターとして地域の水田すべてで作業した経験から、土壌還元の進行に伴う生育停滞を回避する必要性を強く認識している。春鋤込みの比率が高いが、土壌還元の発生に注意した栽培管理が取られており、今後はほ場乾燥化をさらに進めるためにチゼルブラウ耕なども検討されている。

		年次	平成19年	平成20年	平成21年
堆厩肥施用量 kg / 10a			kg	kg	kg
稲わらの処理法	前年産 春鋤込		70%	70%	70%
	当年産 搬出		%	%	%
	秋鋤込		30%	30%	30%
土壌改良材 kg / 10a (鉄ケイカル)			80kg	80kg	80kg
	融雪促進		kg	kg	kg
透排水性改善			溝切り	溝切り	溝切り
(備考)					

注) 「稲わらの処理法」の欄の%は、水稻作付面積に対する割合。

(2) 施肥法、耕起、代かき

近隣地区と比較して初期生育が劣るため、初期生育改善を第一優先に取り組んでいる。全層施肥では耕起 施肥 混和 代かきの作業を行い施肥効率の向上に努めている。地域における側条施肥の有効性を機械オペレーターとしての経験から確認しており、肥培管理の中心技術として重要視している。各水田の土壌診断が3年毎に計画的に行われ、適切な施肥改善が行われている。その結果から、現在は不足しているケイ酸の補給に努め、鉄ケイカルが施用されている。また、これは土壌還元を抑制する目的も兼ねている。

		年次	平成19年			平成20年			平成21年		
項目			N	P	K	N	P	K	N	P	K
施肥 (kg / 10a)	全層		6.4	7.2	6.4	6.4	7.2	6.4	6.4	7.2	6.4
	表層										
	側条		2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8
追肥	kg / 10a										
	期日										

(3) 作付品種

「はくちょうもち」と「風の子もち」を作付けしている。「はくちょうもち」は初期生育の確保が栽培のポイントであると品種特性を把握しており、特性をふまえた上で技術的に高度な採種栽培にも取り組まれている。また減農薬栽培にも取り組んでいる。

項目		年次	平成19年	平成20年	平成21年
作付面積	品種名	はくちょうもち	5.7ha	6.5ha	5.4ha
		風の子もち			2.6ha
		しろくまもち		0.7ha	
		はくちょうもち (減農薬)		0.4ha	0.5ha
		その他(採種)	(1.8ha)	(1.5ha)	(2.6ha)
	合計	5.7ha	7.6ha	8.5ha	

注) 加工用米を除く作付面積。

(4) 育苗と移植

初期生育向上のため育苗施肥に緩効性肥料を導入している。苗の老化を防ぐため育苗ハウスの換気をこまめに行い、健苗育成に努めている。さらに早期移植に努め、全作付面積を移植適期内の5月25日前後には植え終えている。水田が2ヶ所に分散しているため必ずしも移植作業の効率は高くない。このような場合には移植作業の効率を上げるために疎植にしている事があるが、適正な栽植密度で基本技術が確実に実施されている。

項目		年次	平成19年	平成20年	平成21年
育苗形式名			中苗マット	中苗マット	中苗マット
移植時期			5月19日～5月24日	5月20日～5月25日	5月19日～5月23日
栽植	畦幅×株間		33cm×12.5cm	33cm×12.5cm	33cm×12.5cm
密度	m ² 当たり株数		24.2株/m ²	24.2株/m ²	24.2株/m ²
(備考)					

(5) 水管理

用水の水温が低いため、入水の時間は夜間か早朝として日中の水田水温の低下を防いでいる。水回りも朝夕に実施されている。過去に冷害危険期の深水管理をせずに収量を落とした経験から、確実に20cmの深水管理が行えるよう畦塗りなどほ場整備がなされている。また各水田の水稻生育を勘案し、一筆ごとに幼穂形成期を確認しつつ深水管理が行われている。とくに平成21年の不稔歩合は10%程度で、日頃の成果が結果に表れていた。

(6) 乾燥調製作業、その他

JA等による下見検査、普及センターのアドバイスを参考に適期刈り取りを実施している。品質優先で収穫作業が行われている。コンタミ防止のために品種毎の団地化を図るとともに、品種が変わる際にはコンバイン、籾摺り機、籾入れ、乾燥機すべての清掃を徹底している。また、循環式乾燥機55石5台、遠赤外線乾燥機60石3台の乾燥施設(共同)で未ハゼ米防止のため、低温乾燥が心掛けられている。

5 良質米の生産に対する意識と一等米出荷実績

鈴木氏の稲づくりの特徴は、初期生育の確保が第一優先事項になっていることである。水田の乾燥促進とワキ防止のための鉄ケイカル施用、緩効性肥料を用いた苗質の向上と側条施肥、さらに水田水温を高める水管理など初期生育の確保するための基本技術ほぼすべてが取り入れられている。また障害型不稔回避のための深水管理、適期刈り取りなどの基本技術も励行された結果として、平成19年から21年にかけて生産された1,402俵すべてが1等米となっている。

芦別市の典型的な中山間地域にありどうしても作業能率に制約を受けざるを得ない条件下において、また細心の注意が求められる採種栽培もあわせて行いつつ、これらの実績を示したことは賞賛に値する。

鈴木氏には地域の若手農業者の相談役はもとより、北海道のもち米生産を牽引してゆくりリーダーとして一層の活躍を期待したい。

項目		年次			
		平成19年	平成20年	平成21年	3ヵ年の合計
総出荷数量		333俵	598俵	471俵	1,402俵
一等米数量		333俵	598俵	471俵	1,402俵
一等米比率 /		100%	100%	100%	100%
高品質米出荷数量	精米蛋白含有率6.8以下 整粒80%以上	俵	俵	俵	俵
	” 6.8以下	俵	俵	俵	俵
	整粒80%以上	俵	俵	俵	俵
	合計	俵	俵	俵	俵
(備考)					

注) ・ は加工用米及び規格外米を除く出荷数量、一等米比率。俵数は60kgに換算のこと。
高品質米出荷数量は、仕分基準に基づく実績数量とする。